

九州産業大学『基礎教育センター研究紀要』第十五号 抜刷
二〇二五年 二月二十八日 発行

2024年イギリス総選挙をめぐる記録

― エジンバラ郊外での立会人記録など ―

宮内紀子

【研究ノート】

2024年イギリス総選挙をめぐる記録

―エジンバラ郊外での立会人記録など―

宮内紀子

はじめに

2024年5月末スナク首相(当時)が突然、総選挙を発表した。発表途中から雨が降り出し、スーツがびしょ濡れだった。

選挙運動や投票日の様子が見れる！大喜びの私に、友人の母は「テレビは毎日政治のことばかり。嫌になる。選挙で喜んでるのはこの国であなただけよ。」と呆れていた。

投票日、私は1年間の海外研修中でエジンバラに滞在していた。幸運なことに立会人として参加できた。これはこの体験を中心とした記録である。ヒムズワース名誉教授、ユーイング教授、民泊のオーナーSとある投票所の代表者の男性がいなければこれを作成することができなかった。心から感謝申し上げたい。なお本記録は科研課題19K13509の助成による研究の成果にかかわるものである。

ピクニックみたいな日

ある週末、私は長距離バスを乗り継ぎ、スコットランド北部の田舎町の民泊にいた。エジンバラの宿代が高騰したためである。

民泊のオーナーSは、真面目で人のよさそうな年配の女性だった。当時はホステルを転々とする生活で有権者にはなかなか出会えなかった。せっかくのチャンスなので選挙運動などについて質問をした。しばらく話をしていると、Sが長年、投票所の代表者を担当していることを教えてくれ、選挙スタッフ用のマニュアルを見せてくれた。なおマニュアルはネットで公開されている。

投票所は7時から22時まで開場している。Sは6時までには到着するようにしているらしい。スタッフはこの間、外には出られない。驚いていると、「お昼ご飯に夜ご飯、おやつと飲み物も用意していくよ。ピクニックみたいなものよ！」とにこやかに答えていた。数年一度の特別なイベントという感じなんだろうか。

メディアのない町

この町では20代の女性とも話す機会があった。彼女はコロナのロックダウン後にロンドンから移住したようだ。ロンドンに住んでいる頃は、戸別訪問があったが、この選挙区ではないらしい。選挙区が広すぎるからではないかとのことだった。政党情報も含め必要な情報はSNSで入手するらしい。この町にはテレビ局などはない。「この町で昨日、交通事故があったけれども報道されない。メディアは大きな街のことだけ。」と憤っていた。田舎町では、デマかどうか判別するリソースが極端に少ない。彼女の話からSNSに蔓延するデマの、田舎町での深刻さを思い知った。

届かない認定証

投票所マニュアルを読んでいると、投票所に入場できる人物の中に、有権者でも政党関係者でもない認定立会人という存在を知った。立会人になれば投票所に入場できるのではと思った。

立会人は個人でも選挙委員会のウェブサイトから簡単に申し込めた。国籍要件はなく、国外の住所でも入力できるようだった。

ところが、立会人としての活動に必要な認定証が投票日まで届かなかった。最終的に、認定されてはいたが、送付希望先に届けられていなかったことがわかった。申請時、宿を毎週変えていた。住

所がないと審査が通らないかもしれないと思い、適当に記入した。住所とは別の送付希望先を入力でき、大学にしていたのだが、住所に送付されていた。大学を住所とするべきだった。私が悪い。これがわかったのは投票日当日。エジンバラの旧市街地にある選挙委員会の事務所にも行ってみたが、担当者がおらず対応できないとのことだった。絶望。でも私らしいとも思った。

7月4日投票日

認定証は手元になかったが、イギリスなのでどうにかなるかもしれないと7時前に投票所に行った。最寄りの投票所は小学校で、入口に、蛍光ピンクの案内板に「投票所」との表示があった。

すでに選挙人が1人待っていた。7時を数分過ぎても開場せず、おかしいなと思っていると、年配の男性スタッフが投票所を開場させた。この男性に事情を話したところ、会場内にいる代表者に聞いてみなさいと会場に通された。結局、認定証がないとダメとのことだったが、あっさり入場できた。驚いた。

会場は体育館だった。入口スタッフが顔写真付きの身分証明書を持参したか口頭で確認する。長机にスタッフが2人並んで座っており、1人が身分証と選挙人名簿を確認し、もう1人（代表者）が投票用紙を交付する。選挙人は奥にある投票ブースで投票用紙に記入し、受付横の投票箱に投票する。会場内で写真撮影はできない。

別の投票所にも行ったが、ダメだった。投票所には入れたものの、この事態は避けられたはずなので落ち込んだ。自室に帰りたくなかったので大学に向かった。研究室に着席してすぐ、ヒムズワース名誉教授とユーイング教授のことを思い出した。お二人とも著名な憲法学者で、イギリス憲法研究会を通じて交流があった。

エジンバラに引越してすぐにヒムズワース名誉教授にお会いしていた。研究のことを相談した後、投票所に入場できる方法がないかと尋ねた。「当日、会場で聞いてみればいいんじゃないかな。研究なら理解してくれるかもしれないね。」と言われていた。

ユーイング教授と妻のゲイルはスコットランド出身。生まれ育った町を聞いていた。たぶん投票所は見学できないけど、著名な憲法学者が育った町を見に行ってみよう、そう思い立った。

テラーがいる！

エジンバラ市内からバスでおよそ1時間。山の麓にある静かな町に到着した。スポーツ施設の投票所を訪問した。建物入口に胸にリボンのロゼットを付けた男性がいた。テラーだ！興奮した。

テラーはマニュアルによると、政党や立候補者のために投票所の出入り口に立ち、有権者の人数を数えたりしているらしい。法的根拠はない。私が会った人物はスコットランド国民党カラーの黄色と黒色のロゼットを付けていた。この町でしか見かけなかったし、今

まで見たことがないと言っている友人もいた。マニュアルには書かれていたが、珍しい存在なのかもしれない。

挨拶をしたり、身分証を持っているか聞いたり、投票所の案内スタッフと同じような呼びかけをしていた。テラーは特定の候補者や政党への投票（投票しないことも含む）を求めることはできない。これらを連想させるような政治的な話もできない。「直接的な呼びかけはできないけど、私が立っていることで特定の政党を思い出してくれる人もいるかもしれないからね。」とのことだった。とても穏やかな男性で定年退職前は歴史の先生をしていたらしい。

立会人

会場案内スタッフに代表者を紹介してもらい、代表者に研究と授業のためにどうしても見学させてほしいとお願いした。しばらく考えた後、「いいよ、私の権限で立会人として扱うよ。」と言ってくれた。聞き間違いかと思ったが、目の前の椅子を案内された。

この会場は普段は体操などに使われている部屋のように大きな鏡があり、壁には何かの器具がかけられていた。鏡とは反対側の大きな窓からは1階のプールが見えた。会場には5つの投票所（箱）が集まっていた。会場前の壁に、投票所番号と通り名の一覧が掲示されていた。これを見て、会場内の指定の投票所に向かう。投票までの手続きはどれも同じである。受付と交付は2人セットで行うので、

この会場にはスタッフが10人いた。

そういえばマニュアルを読んでいて驚いたことがある。投票用紙には番号があつて、交付する際に受付係が選挙人名簿にこれを記載する。投票内容を調べることができるのでは？民泊オーナーSは、「理論上は可能だけれど、すぐに開票作業所に運ばないといけないからそんな時間はないよ。」と言っていた。とはいえ、自分の投票用紙の番号を把握されるのは、あまりいい気はしない。

選挙人名簿はA4用紙に横向きに印刷されていた。どの投票所でも物差しを使いながら、個人情報を確認し、投票用紙の番号を記載していた。交付係はときどき、投票箱の口に物差しを入れて中の投票用紙を押していた。投票箱は大きさや材質に微妙なばらつきがあるようだった。

投票用紙を直接見ることは許可されなかったが、投票ブース近くには投票用紙を拡大したものが掲示されていた。交付時、選挙人によく見せながら投票方法を説明していたので、実は少し投票用紙が見えていた。立候補者の情報は投票用紙に印刷されているのでチェックを付けるだけである。シンボルマークがある政党はこれも印刷される。選挙人にも開封作業の担当者にもわかりやすい。

投票所には子どもも入場できる。友人は子どもの頃、父親の投票用紙に記入をしていたらしい。犬などのベットは入場できない。投票所前で待たされるベットの写真は選挙名物なようで、BBCの選挙特番でも特集されていた。馬やヘビの写真もあった。

政治的なものを身に着けたまま投票しても問題ないようで、私が話した人とは別のテラーはロゼットを付けたまま投票していた。

法改正により、投票には写真付きの身分証明書が必要になった。BBCは利用可能な身分証について何度もアナウンスをしていた。パスポートと運転免許証の利用が多いようだった。ある友人は「今まで身分証がなくても、問題なく投票できたのに。」と怒っていた。投票所の代表者は、「パスポートは一定の年齢にならないととらない。若年層は不利だと言われている。」とこつそり教えてくれた。法改正をしたジョンソン元首相は5月のイングランドでの地方選挙で身分証を忘れて投票所から出てきたと報道されていた。

イギリスでは通常投票のほか、郵便投票と代理人投票がある。郵便投票を選択すると、投票所で投票できないが、記入を済ませ封筒に入れ封をしたものを投票所に直接持つて行くことはできる。何人かは郵便投票を選択しながら直接来ていた。この場合は投票箱には投票せず、封筒ごと交付係に手渡しして終わり。そういえば、ある年配の女性は選挙人名簿に名前がなかったようで、投票できずに帰っていた。

選挙人の入場が落ち着いてくると、選挙スタッフが受付の長机で家から持ってきたサンドウィッチなどを食べ始めた。選挙人が来ると中断して受付を始める。会場外の案内係はときどき場所を交代しているようだったが、受付係と交付係は交代なしだった。思っていたより過酷そうだった。

選挙スタッフは白や黒の地味な色のセーターやネルシャツを着ていた。選挙スタッフは特定の政党を連想させるようなもの（色も含む）を身に着けてはいけないルールになっている。

実は、案内スタッフの1人は労働党カラーの真っ赤なウインドブレーカーを着ていた。7月だったが、この日は風が吹いていて寒かった。入口で見かけたとき、この人もテラーだと思った。スタッフカードを首から下げていて投票所スタッフだとわかった。内心びっくりした。スタッフに髪の毛を赤く染めている人がいる場合、染め直すのだろうか。

当初、5分くらいで帰ろうとした。すると代表者に「もう帰るの？好きなだけいいんだよ。」と言ってもらい、結局、1時間くらい見学していた。代表者以外のスタッフが私のことを気にし始めたので、これ以上は迷惑かなと立ち去ることにした。代表者の男性は70代で「もう年だから、今回でこの業務はやめようと思ってる。」と話していた。最後だからいいかな、と思ってくれたのかもしれない。本当にありがたかった。

投票所めぐり

人の親切に触れ、ものすごく幸せな気分になった。おかしいと自覚しつつ、妙なテンションでほかの投票所も訪問した。投票所は学校やコミュニティセンター、地域の小さなスポーツクラブ（例え

ばボウリングクラブなど）が多いが、教会やホテルも会場に使用されていた。BBCではバブやコインランドリーなどの例も紹介されていた。教会を会場とする投票所も訪問した。椅子がすべて撤去され、代わりに受付・投票箱・投票ブースが設置されていた。十字架はそのままだった。日本の投票所入場整理券のようなものがイギリスでも送付されるようである（なくても投票できる）。事前にどの投票所かがわかるようなので、教会に入りたくない人は郵便投票を選択するのだろうか。

エジンバラ市内に戻って夕方まで投票所巡りをした。合計9か所訪問した。複数の場所では選挙人がいない間に会場内に入れてくれたり、投票までの流れを説明してくれたりした。あるスタッフは日本人女性と最近、結婚したらしい。日本での結婚式の写真を見せてくれた。私が会ったテラーの息子も日本人女性と結婚しているらしい。親子だったりして。

櫛の奪い合い

帰宅してしばらくBBC放送を見ていたが、くたくたに疲れていて、いつの間にか寝ていた。スターマーの勝利宣言とスナクの敗北宣言はうっすら意識があったが、気が付いたら朝だった。

今回の選挙で政権交代になるとは思っていた。けれども、トラスやモードラントなど有名どころの落選が次々に報道されたことには驚

いた。スナクは落選したらアメリカに家族で移住するのではと噂されていたが、皮肉なことに彼は当選していた。

保守党で最初に落選が報道されたバックランドは、「ハゲた男たちが櫛を奪い合っているようだ」「もううんざりだ!」と、保守党内に蔓延する利己的な個人プレーを、強い口調で批判した。この発言を聞いて、ブラヴァマンが一番に思い浮かんだ。

おわりに

スコットランドではスコットランド国民党が惨敗した。私がテラーに会えたのは、きつと焦りがあったからだっただろう。

選挙後しばらくしてから認定立会人の認定証が届いた。認定立会人の氏名はウェブ上で公開されており、私の名前も記載されていた。使用できずに帰国したが、2026年まで有効。延長もできるそうである。いつか使えることがあるだろうか。

イギリス人で講師の友人に、外国人だけでも立会人として投票所に入ることができたことを興奮気味に話していると、「全部公開する、それが民主主義でしょ?」と言われた。寛大な民主主義のおかげで貴重な体験ができた。イギリスがより一層好きになった。

ところで、在外選挙人登録の手続きを済ませてから渡英していた。衆議院選挙の噂が報道されていたためである。結局、衆議院は解散されることなく帰国することになり、残念だったなと思っていた。

すると突然の衆議院解散。帰国してから3か月たっていなかったの
で、在外選挙人として国内で投票することができた。期日前投票に行った。在外選挙人証とパスポートを提示し、担当者が在外選挙人用の名簿と突き合わせ確認し、確か氏名や出国前の住所を書面に記載し、衆議院選挙と国民投票を行った。在外選挙人証には、第50回衆議院総選挙と第26回最高裁判所国民審査での投票が記録された。欲を言えば大使館で投票したかったが、在外選挙人として投票できたことはラッキーだった。



写真(筆者撮影) 右上…ホテルの投票所前、右下…テラー、左下…教会の投票所前(車の向こうに傘が写っている。これはテラーのもので政党カラーだった)。